

もう15年程前になるだろうか、H男さんの5年間のケースを引っ繰り返り、彼の不穏行動の推移をグラフ化したことがあった。その頃の彼は、およそ一年中(と研究する前までは思っていたのだが)大声を上げながら、開いた窓はバタバタ走り回って閉めて回り、職員や他の利用者が開けたドアは、即座に駆け寄ってバタンバタンと開け閉めを反復的に繰り返していた。さらに建物のあちらこちらで失尿、失便を一日何回となく繰り返す、叱られることもずっと多かったのだろう、視線はいつもおどおどと宙を彷徨っていた。

ところが、この5年間の不穏行動の推移を表したグラフは、毎年、7月中旬から8月にかけては、比較的穏やかな日が続く、9月の中旬ともなれば、次第に不穏状況が激しくなり、それが翌6月まで続くことを毎年同じように繰り返していることを如実に示していたのだった。私たちはこの変化を、気温の下がってくる9月から冬、春、そして梅雨の翌6月までが、彼の心の不安定な時期であり、気温の上昇と共にそれが解決されていると考え、背景には、「自律神経失調症」があるのではと仮定したのだった。

生理的基盤安定の重要性

自閉症や知的障害の方々が大脳皮質、特に抽象概念を扱っている新皮質(よりよく生きるための脳と言われている)を中心に脳機能障害を抱えているとは考え難い。おそらくそれより下位の辺縁系(たくましく生きるための脳と言われている)、またさらに下位の脳幹・脊髄系(生きるための脳と言われている)にまで、機能障害がある可能性を考えるのが自然だろう。

食べる、寝る、排泄する、体温調節する、刺激入力を制御する等の原始的な脳機能の安定があって初めて、よりよく生きるためのステップへと進むことができるのである。

背中が、毎日のように寒気でゾクゾクし、その原因が自分で全くわからないのであれば、それは落ち着いていられないでしょう。心も体も。

私たちは、本人と相談しながら、7、8月を除き、<使い捨てカイロ>を背中に当て、それと並行して通年を通して、自律神経失調状態に効果があり、味も少々甘くて飲み易いと思われる<養命酒>を飲用することを始めました。

効果はてきめんでした。もちろん不穏状態が全くなるはずも無いのですが、7月から8月の状態が一年中続くようになったのです。それから15年たった今でも<使い捨てカイロ>の実践は続いています。<養命酒>の方は7~8年経った頃でしょうか? H男さんの方から「もう飲まない」と養命酒を注いだ容器を押し返すことがあって、中止となりました。その頃には、ずいぶん彼は落ち着いてきていて、職員は「もう飲まなくても大丈夫だって、自分でわかるんじゃないの?」なんて言いながら、彼の主張を受け入れたのでした。

【解説】

<昨日と違うその人を発見する>、それが私たち支援に携わるものの大いなる専門性の一部なのだが、<昨日><今日>のスペンでは捉え切れない行動の変化もある。週単位、月単位、年単位の<その人>を鳥瞰的に眺めることで、本人の言葉にならない訴えを、心の叫びを捉えることができる。

さらに捉えようとするスペンが長くなればなるほど、記録の重要性が高まる。職員集団が、本人に寄り添った視点で、同じような理解の方法で記録を記述し続ける必要性がここにある。